

会報

51号



函館の歴史的風土を守る会会報  
No.51 H 7. 10. 1

発行所 函館の歴史的風土を守る会  
事務局 函館市五稜郭町43-9  
五稜郭タワー株式会社内(中田)  
電話(0138)51-4785  
印刷所 双葉印刷 電話 53-7730番

【小樽再生フォーラム創立10周年記念全国セミナー】

## 小樽まちなみゼミ

「小樽まちづくり運動・第2章——明日に向かって——」に出席して

会長 浜島 国四郎

8月20日、晴れ間に土砂降りといった小樽でした。開会の挨拶から地ビールレストラン「アレフ」の懇親会まで、私にとっては本当に充実した一日でした。

小樽再生フォーラム顧問 峯山富美さんの基調報告……「私達のこの20年の運動は“運河を守る”という言葉そのものがタブーだったときの10年、そして一応の決着、仲間の分裂、挫折感、それらを耐えに耐え乗り越えて歩き続けてきた10年間でした。」と語る、その多彩で充実した話は会場をして、息をのむほどの真情に溢れたものでした。

「今日が小樽のまちづくりの第1章の終わりで、そして今日がその第2章の始まりです。」と結んだ時の会場の興奮と拍手は、今でも私の胸を熱くする程です。第一部会から第三部会まで文字通りこれが基調になった話し合いでした。

「そこに人々がいる。日常の営みがある。その積み重ねが歴史であり、文化である。」とした小樽のまちづくりの高い理想は、ぎらぎらした金びかのものじゃない。これを秘めた市民意識の熟成を持つべきだ。そのための運河問題でなかったのか、小樽の文化遺産の受け止め方は、といった視点があったように思います。

振り返って函館は、そして歴風会は……皆さんとじっくり話し合わねばと思ったことでした。以上で報告とします。

※これでは何があったのかわからないと思いますので、峯山さんの基調報告の要約を収めました。これらの行動からお汲み取りいただければと思います。詳しくは「小樽運河問題の20年」他の資料がありますのでご利用ください。

## 小樽運河問題顧みて

小樽再生フォーラム顧問 峯山 富美

今から20年前、昭和50年3月華々しく運河を守る会は誕生した。

それが1年足らずで藤森茂男事務局長が降板、越崎宗一会長の急死という致命的な打撃を受けた。

行財界が道路促進を強力に打ち出し「運河を守る」という言葉はタブー、そのような厳しい状況の中でひるむことなく保存を主張し続けたのは、全く肩書きのない一握りの市民20名程であった。幸い北大足達研究室の3名のシンクタンクの全面的な協力を得て充実した運動を展開することが出来た。

運河学とも言うべき運河講座の開催、中央講師によるシンポジウム、行政との対決代案の検討、国・道・市に対する陳情要請、さらに運河清掃、ポर्टフェスティバル参加、ニュース発行、紙芝居、署名活動と寸暇を惜しんでの運動であった。

市内での運動は困難を極めたが、札幌で東京で旭川で、そして全国の町並みの方々、各大学の先生方の支援を頂き、かてて加えてマスコミの報道も預かって、

運動は次第に力を得ていった。遂に百人委員会の結成をみ、9万8千人の署名を得るに至った。

問題は中央省庁にもち込まれたが、行政の壁は厚く、運河公園構想による六車線道路建設で終結した。併しこの10年の運動は徒勞に終わったとは思わない。初めは無関心だった市民も、自らの住んでいる町を見直し、先人の遺した歴史、生活文化に注目、この町の魅力を共感し、これを伝承する責任を感じ合った。それに単に継承するに留らず、自らも今この町に生きている者として、文化の創造に、住みよいまちづくりに参加してゆくことの重要性を確認し合えた。

今、運河には500万の観光客が訪れている。私共の思いを超えたブームで運河周辺は変貌した。まちは観光客のためのものではない。そこに住みついている人々にとってどうあるべきかが問題なのである。

運河問題は一応の決着がついたが、運河運動のこのころと、市を二分するとまで言われたあのエネルギーを埋めてしまってはならない。町は生きもの、常に流動する。

私共は絶えずこのまちを見つめつつ人間性ゆたかな真のまちづくりを望み、行動するものでありたい。そのような生き方を運河は私共に教えてくれた。

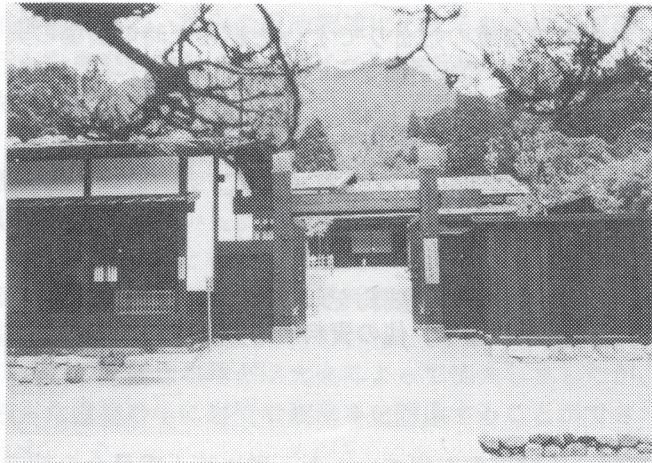
【第18回全国町並みゼミ妻籠大会に参加して】

## 「町並み保存の原点を、みんなで喋り考えよう。」

函館市都市建設部都市景観課 榎 森 隆 介

全国町並み保存連盟創立20周年記念、第18回全国町並みゼミが南木曾町妻籠宿において、9月8日から9月10日までの日程で開催されました。

妻籠宿は、中山道69次の宿場町のひとつであり、この集落保存事業が全国の町並み保存のさきがけとなり、また、単体ではなく面としての文化財である「伝統的建造物群」と言う観念を生み出す契機となった記念すべき地であり、また、江戸時代の宿場町のたたずまいが、年間にして90万人余の観光客を呼び寄せる長野屈指の観光地ともなっております。

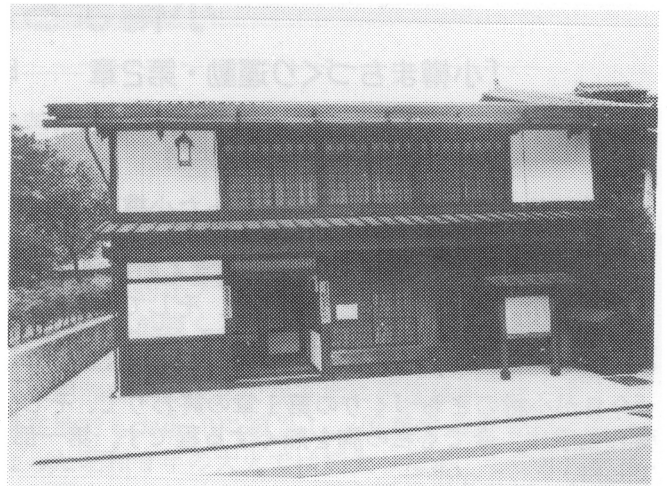


(妻籠宿本陣)

全国町並み保存連盟が結成されて20周年を迎える節目の年に、町並み保存運動発祥の地である妻籠において、北は北海道から南は沖縄の竹富島にいたるまでの全国各地から、日頃、町並み保存に尽力されている地域住民、研究者、事業者などの皆さんが一同に集い、町並み保存の原点に立ち返り、語り合った意義に深い感慨を覚えたところです。

第1日目の東京大学名誉教授太田博太郎先生の記念講演「妻籠宿の保存」を拝聴し、また、第2日目の第1分科会「町並み保存の原点を、みんなで喋り考えよう。」に参加させていただいて、妻籠においては、集落保存事業が過疎対策、観光対策としても見事な成果を納めていることに感心させられるとともに、全国各地においては、町並み保存と過疎化、観光地化にともなう諸問題が微妙に絡みあって、町並み保存に関わる

人々の大きな関心事となっている状況を知らされました。



(妻籠郵便局)

函館市にあっても、西部地区の歴史的景観形成地域における町並み保存と、建物の老朽化などによる過疎化傾向、また、観光地化にともなう弊害の発生など、今後とも取り組んでいかなければならない諸問題について思いを新たにしたところです。

終わりに、妻籠の町をフラフラと歩いて見て、感じたこと、「妻籠の町並みは、ホルマリン漬けで保存されているのではなく、血が通って生き生きと活動してるな!」、ちょっとついでに「通りに自動販売機が見当たらないのは、不便かつ奥ゆかしい。」



(妻籠宿の町並み)

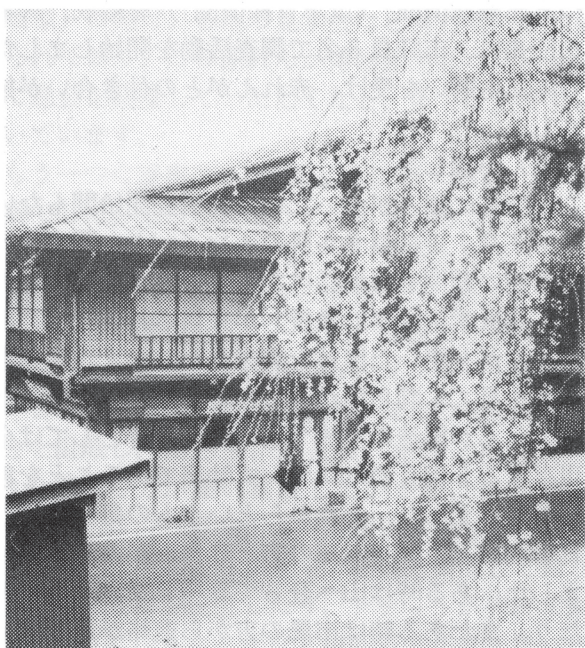
## 立場茶屋「たせや」木曾路にて

会員 佐藤 恒子

今年、春の旅行は、奈良井・妻籠・馬籠の木曾路に決定。長野で乗り換え奈良井へと向かう。着いた奈良井は、小雨にけぶり残念ではあったが、情緒豊かな落ち着いた宿場であった。

木材の集積地上松が、今夜の宿である。「三百年続く民宿たせや」と本にあり、建物に関心がある私にはとても興味があり、心引かれる宿のようである。もう一つには、「寝ざめの床」が近かったから。

「立場茶屋たせや」の前のしだれ桜が、やさしく私達を迎えてくれた。



民宿「たせや」前にて

「たせや」の名は、昔この辺りを中津川たせ村といた頃につけられたという。

広い土間、拭き込まれた上り框、気泡の入ったガラス戸。土間で飼われていた「カケス」が迎えてくれた。雨でぬれた衣服を「こたつ」で乾かした。

今夜の泊り客は、私達一組であった。食後気さくな奥さんが色々聞かせてくれた。「立場茶屋たせや」は、木曾宿十一の宿場の真中に位置し、大名や役人のお休憩として、立寄った所だという。当時は、「蕎麦や」を商い、今の食堂でもあったという。家の脇道には、木が間隔よく植えてあり、昔は、馬を繋いだという。「たせや」は、とても大きく、骨組が、がっしりしていて、囲炉裏は大きく畳、一畳はある。すすで天窓迄黒光りしている。現在の「たせや」は、明治二年に改築。当時大名や役人の泊まった上段の間があり、昔寝ざめの床がよく見えたそうだ。うるし塗りの襖や窓

枠など、当時を偲ぶ事が出来る。

奥さんが嫁いだ時は、ご主人のお母様が亡くなって居り、おばあさんが、采配していたという。いつも炉端に坐り、長煙管を食え指図していたという。

中仙道も世の移り変わりにはついて行けず、東海道線が開通した。その直前、知恩院のご門跡様が「これが最後です」とお立寄りになったという。東海道線開通で、中仙道は、大きく変わり「たせや」も変ざるを得なかったのであろう。大きな囲炉裏に、薪をくべ、けむい煙りの炉端で、古い和綴りの宿帳をめくる。

「島津藩」「大内藩」の名が連る。大名が泊まるとなると、立場茶屋は、三日も店を休み、大掃除、障子張りなど採算は合わなかったという。囲炉裏にかかる炉鍵は、真黒にいぶしがかかり、高い天井より下っている。炉鍵は魚を彫った松材を使い、調節する鍵の部分は、根曲り竹で、杵は梅の木の真直な枝を使用している。なるほど「松竹梅」となる。材料を裏山から選んだという資産家の力を垣間見た。「蕎麦や」の頃の土間の一部は、広い部屋に改造され、そこで食事をした。奥さんが作ってくれた「ごま豆腐」は絶品で、その味は忘れられない。

雨の中、天然記念物、寝ざめの床迄足を伸ばす。天下の奇勝と言われる自然は迫力に満ち、又、造形も見事であった。木材の町上松は、桧の産地でもあり、お土産に手作りの桧のお箸を頂き、ご主人の運転で送られ、「立場茶屋たせや」を後にした。



大きな囲炉裏前

## 赤れんがのまち・舞鶴

舞鶴市立赤れんが博物館 主任 石原雅章

平成5年11月、京都府舞鶴市に赤れんがの倉庫を転活用して、れんがをテーマにした「赤れんが博物館」が開館しました。開館までの経緯をまちづくりの状況まじえながらご紹介いたします。

### <赤れんがのまち——日本—>

舞鶴市内には今も70件以上のれんが建造物が残っています。明治34年に旧舞鶴海軍の鎮守府開庁に伴い、旧海軍の諸施設を中心にれんがを使用した建造物が数多く建設されました。旧海軍の倉庫や工場、水道施設、陸軍の砲台、鉄道施設、れんがを焼いた窯などです。ただこれられんが建造物は、積極的に保存され残ったものではなく、他の用途で使用され、または放置されてきたものであり、大規模な開発がなかったことも幸いしています。

このように残存数は日本有数であること、多用途の施設があること、れんがの生産施設が残っていること、れんが建造物の転活用を図っていること、市民に「赤れんがのまち」という意識が芽生えていることなどから日本一の「赤れんがのまち」といえるのではないのでしょうか。

### <赤れんがのまち・舞鶴のはじまり>

赤れんが博物館開設までには、行政や市民グループなどの様々な取り組みがありました。多くの市民は普段から見慣れた風景であり、以前から、市内に残る赤れんが倉庫の持つ価値を認めていたわけではありませんでした。戦争の遺物として暗いイメージもあり、赤れんが倉庫を転活用してまちづくりに生かしていこうとは考えられてもいなかったのです。赤れんが倉庫の活用が表に出始めたのは平成に入ってからであり、平成元年に折からのリゾートブームに乗り、丹後リゾート構想の重点整備地区として赤れんが倉庫群の転活用が組み込まれたのが最初ではないかと思えます。また、平成2年6月、赤れんがを生かしたまちづくりをめざし、市長を団長に小樽、函館等を巡る北海道れんが視察ツアー「ベイエリア in 北海道」に約100名の市民が参加し、小樽行きフェリーの中、熱い議論がたたかわされました。この頃から赤れんがを取り巻く市民グループ等の動きも活発になり、赤れんが倉庫の転活用の機運が盛り上がってきました。

昭和63年、市の若手職員75人で市の将来のまちづくりについて研究するため自主研究グループとして舞鶴まちづくり推進調査研究会（以下「舞鶴まち研」）が発足。現・下水道建設課 馬場英男課長が、初代会長となり、各分科会で活動が始まりました。その後馬場

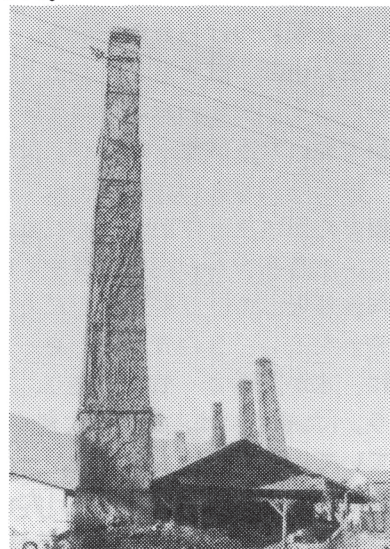
課長が所属する分科会が横浜市職員で組織する横浜まちづくり研究会（以下「横浜まち研」）と交流する中で、横浜の新港埠頭の赤れんが倉庫2棟を赤れんがパークとして活用を検討していることを聞き、「舞鶴のまちづくりに今タイムリーに赤れんがを生かせる」と直感したと聞いています。これを契機に、平成元年11月末から舞鶴まち研の有志で市所有の赤れんが倉庫のライトアップなど活動が始まりました。また、市内に何棟の赤れんが建造物があるのかも把握しておらず、これら建造物を調査するため、平成2年春に「まいつる建築探偵団」（以下「探偵団」）を結成。馬場課長を団長に、市職員8名で調査活動を開始しました。この時私も誘いを受け、赤れんがとの付き合いが始まりました。

### <赤れんが探し>

この調査に弾みがついたのは、調査開始間もない平成2年7月7日横浜まち研のメンバーと、現在赤れんが博物館の顧問をお世話になっている水野信太郎先生（現・金沢学院大学助教授）が来鶴され、市内神崎にあるれんがを焼いた窯跡を調査した時です。私達素人が窯跡を見ても判らなかつたのですが、先生によると、日本のれんが製造の主流であった、当時としては全国で現存する5例目のホフマン式輪窯であることを教えていただきました。それからというもの毎週のように休日を利用し、メンバーの方と赤れんがの探索が始まりました。ある時は山へ登っても発見できずガッカリしたり、またある時は市民の方から連絡が入り急いで調査に出掛けたり……。赤れんが建造物70以上を確認することができました。

### <第1回赤煉瓦

シンポジウムの開催>  
舞鶴まち研、探偵団、横浜まち研による実行委員会をつくり、平成2年11月25日、第1回赤煉瓦シンポジウムを開催しました。市内に残るれんが建造物を紹介し、赤れんがの持つ魅力を語り合い、赤れんがにゆかりのある都市



（神崎ホフマン輪窯）

が互いに交流して、赤れんがを生かしたまちづくりのきっかけにしたいという思いがありました。20都市から約180人が参加。参加者には、赤れんが建造物の調査結果をマップにして配布しました。また、会場では、赤れんがの魅力について熱心に討議され、舞鶴が赤れんがの宝庫であることがはじめて知らされたのです。

懇親会では、2つの提案がなされました。1つは「赤煉瓦ネットワーク」設立の提案でした。この赤煉瓦ネットワークは、赤れんがでつくられた全国の建物・施設の保存活動を中心に、まちづくりのネットワークを形成し、交流を図っていこうと提案されたものです。翌年の平成3年10月12日には、北海道江別市、横浜市、舞鶴市、呉市などのグループ、個人等の参加で設立。横浜市の皆さんが事務局を持たれ、機関誌「輪環」の発行、各地の見学会など精力的に活動を続けられており、この赤れんが博物館開館に合わせて舞鶴で総会を開催していただくなど、多大な支援をいただいています。

もう一つの提案は、「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」設立の提案でした。市の職員だけで活動するのではなく、市民と一緒に幅広い活動を行っていこうと平成3年6月1日に設立。現在約190名の会員で、「赤煉瓦ネットワーク」の受け皿として、また、情報の交換や毎年夏には赤れんが倉庫群で野外ジャズコンサートを開催しています。現在は赤煉瓦倶楽部・舞鶴の有志で実行委員会を組織し、商店主、会社員、主婦、市職員など様々な職種の方が集い継続しています。出演者も、ジョージ川口、日野皓正、阿川泰子、雪村いづみ、北村英治ら一流のミュージシャンを迎え開催しておりますが、雨で会場を変更したり、チケットが売れず赤字を出しそうになったことなど毎回苦労が絶えない状況です。

#### <赤れんが博物館>

赤れんが博物館は、市制施行50周年記念事業の一環として、平成5年11月オープン。赤れんが倉庫を転活用し、舞鶴の歴史と個性を表現する「れんが」をテーマにした世界に類のない博物館です。

建物は、旧舞鶴海軍兵器廠魚形水雷庫として日露戦争直前の明治36年に建設された赤れんが倉庫で、本格的な鉄骨構造のれんが建築物としては、わが国に現存する最古級のものとして、市指定文化財になっています。

一階は世界のれんがを紹介、インダス文明モエンジョダロ遺跡のれんがやエジプト文明魚の丘遺跡の日干しれんがなど四大文明のれんがを中心に、万里の長城、アウシュビッツ収容所、クレムリン宮殿のれんがなど世界の歴史的な建造物に使用されていたれんがを模型や写真とともに紹介。また、日本のれんが製造の

主流だったホフマン式輪窯をシアター用に再現し、マジックビジョンでれんがの発祥、製造等を紹介しています。

二階では、天平時代から現在までの日本れんがの歩みと舞鶴市内に残るれんが建造物を紹介。れんがのアーチづくりなどを楽しんでもらうコーナーなども設置しています。

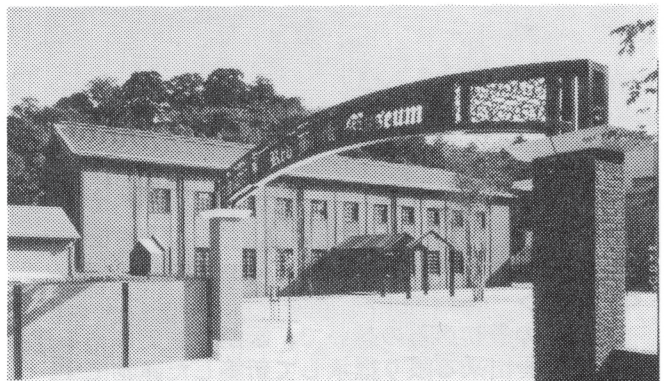
#### <博物館オープンしてから2年>

赤れんが博物館が平成5年11月にオープンしてから、約2年が経過しました。オープン後は、展示や収集など博物館本来の活動のほか、5月の連休には博物館周辺をめぐるスタンプラリーを実施したり、れんがに関わる絵画展、前庭でのコンサートなどを開催しています。昨年2月にはドイツのリュベック市から、自分達のまちを描いた子供達の作品が届き、同市の13世紀のセント・ペトリ教会のれんがとともに紹介。10月には大英博物館の協力を得て写真展を開催するとともに、イギリスのポーツマス市からはパーネット市長が同市の歴史的建造物のれんがをお土産に来館されるなど、れんがをとおして国際交流も次第に活発になってきています。

ただ、博物館ということで、リピーターが少なく、次第に市民との距離が広がっていくのではないかと心配しています。「れんが」をとおして、市民との関わりを図れる事業展開も今後検討していく必要があると考えています。

また、昨年10月には、赤れんが倉庫展活用第2号として、舞鶴市政記念館がオープンしました。ミニコンサートや展示などに利用できる多目的ホール、喫茶コーナー、市の歩みを紹介したコーナーを備えています。ホールはれんが倉庫独特の雰囲気もあり、多くの市民によって個展やコンサートなど文化的催し等に利用されています。

現在市内に残る数多くの赤れんが建造物の転活用については、特に決まっていませんが、近い将来新たな魅力を加えながら「赤れんがのまち・舞鶴」として市民が誇れるまちになっていくものと考えています。



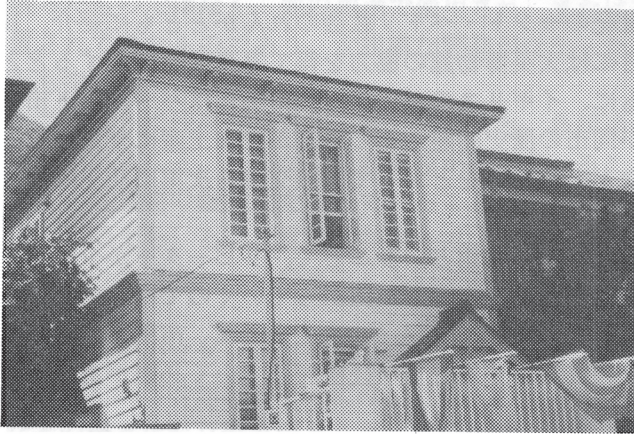
(舞鶴市立赤れんが博物館)

## “歴風会とわたし”

運営委員 上 貞 幸 丕

街造り、地域造り、環境問題等、多くの論議がなされて久しくなりました。函館に於いても他都市に増して、活発に運営がなされてきたように思う。この10年間の街並みの変化は、その成果がある程度実現したと思われま。この街特有の地形の美しさの中に、異国文化であった建築様式の表情も永く人々に親しまれ、函館の文化として定着し、共通の美意識となり、生活者の目からも、豊かさを含んだわかりやすいものとなったように思う。選ばれた特定の建物だけでなく、広くその表情を持った建物が再生されていることは喜ばしいことです。この美意識を根拠にし、新しい建物にも現代の成果として、創作される事を願う。学び、考え、行動を常とし、具体的な事柄については、賛否の論議を広め、善悪を世に問い、又、チャリティーパーティーは、多くの人々と思考・行動を共にした。歴風賞は、その示しと区切りを世に発した。こうした歴風会の働らきは、世に対する愛情であり、人間の原点であると解釈している。

◆設計活動20年間に於いて歴風賞をいただいた4つの建物について取り上げてみました。



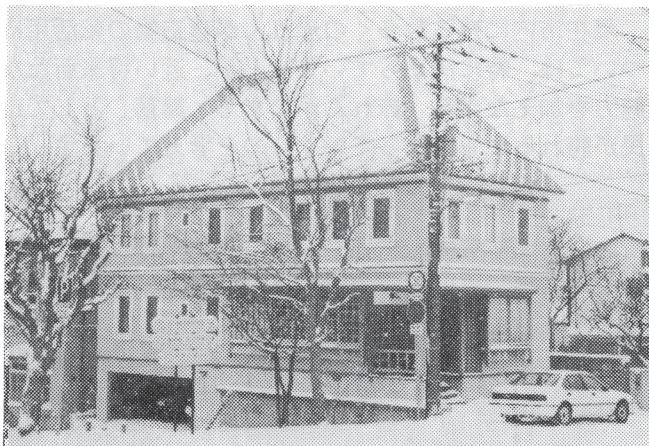
<小林邸>

保存建物の上位にランクされた、この建物は、住み主の不便さから残すか、取り壊すかの判断を迫られていた時、田尻さんが、私の仕事場にひょっこりと現われ、上貞さん、あの建物を取り壊すのかと無念の表情であった。言葉少ない中に、迷っていた自分の目がさまされ、恥ずかしい思いがした。幸いにして、保存・再生が為された。



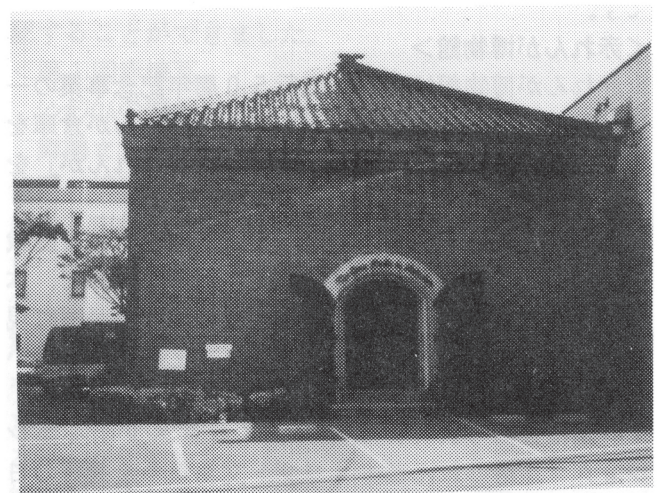
<ロフトオブアート>

製網会社の倉庫であったこの建物は、中の附属物を取り払うと沸々とレンガがエネルギーを発していた。この神秘的空間に控え目ながら明確な意志を持って新しい機能と形を加えた。



<河内邸>

建て主の最初からの想いで、函館の歴史にある建築群の遺産を出来る限り継承して新築した建物です。二十間坂におけるたざまいは正解でした。



<ガラススタジオ イン ハコダテ>

元々の素材が素晴らしいこの倉庫も、現代の手法をなるべくさけ、再生がなされた。

(建築家)

# 「創業守成」

運営委員 若山 直

「函館空港拡張工事中に縄文時代の大集落を発見」の大見出しが北海道新聞を飾ったのはつい先月の事である。日本の古代史を大きく変える発見だと言う。時代が新しくなるに従って昔がよみがえってくるのは逆説的であり、有史以来という感覚も時代によって変化していく。このような中で歴史が発展していくとすれば「歴史的な風土を守る」という事はどういう実態を言うのだろうか。

五島軒は幕末期に日本橋で米問屋を営んでいた若山惣太郎が米相場に失敗して店をたたみ、再起をかけて函館に来た時に始まる。翌年彼は五島（ごしま）英吉に出会い、「ロシア料理とパン・ケーキの店」を開店したが、店名の由来は初代コック長の功績を讃えてつけたとされている。英吉は五島（ごとう）列島出身の長崎通辞で幕軍に参加し、明治2年に五稜郭落城とともに脱出してロシア・ハリストス教会のニコライ神父の門をたたき匿まわれていた。入信し、下僕として働きつつ、ロシア料理を覚えたのである。教会資料では宗近治と名乗ったというが、五島列島の宗氏は少数で、年齢・家族を含め不明な点が多く確証はない。しかし、幕末期には、幕令として「仏語学習命令」を受けていた通辞の一人として、ブリュネ大尉指揮する軍事顧問団と榎本ら旧幕軍首脳部との通辞を勤めた事は推定できる。幕府滅亡は同盟国フランスの対日政策の失敗であり、新政府と同盟したイギリスの勝利でもあった。先発後進のロシアは中立を保っており、英吉はロシア教会を頼った訳だが、仏露は文化的に密接であった。当時のロシア上層階級の人々は、幼児期に「お雇いフランス人家庭教師」に育てられ、むしろロシア語のあやしい者が多かった程である。ロシア皇帝の歴代のコック長はフランス人であり、彼らがロシア食材によって開発した料理が仏露の古典的献立に多くみられる。五島列島は「五島くずれ」で有名なように、最も苛酷にキリシタン弾圧が行われた土地である。明治とともに神父達が教会を復興したとき、250年の間に絶え果てたはずの隠れキリシタンが続々とその門をくぐったと記録されている。

入信後10年、英吉は習い覚えたロシア料理を自立の手段として惣太郎と共に働くが、その期間は創業より7年間である。19年の大火で店が消失したのを機として英吉は横浜に去った。新店の広告には「横浜よりフランス帰りのコックを願い入れ」とある。しかし、そのフランス帰りのコックの伝記は明らかでなく、英吉同様に謎が多い。献立の実態でみると、露仏の看板料

理は別として、いわゆる洋食とされる多くのもの、カレーライス、ハヤシライス、ビーフシチュー、アワビのクリーム煮等々がすでに定番化されていた以上経営には別条がなかったと思われる。英吉の偉大さは7年間に「原形」となる料理を確立した事であり、110年後の現代人にも通用する古典的定番メニューを残した事である。つまり、ヨーロッパの名は冠しても、洋食という新しいタイプの日本料理の誕生である。日本はロシア貴族のフランス化と対極的に、徹底した義務教育の普及により、あらゆる文物を日本化する過程にあり、英吉の仕事もこの過程に含まれる。新しい店舗の名称は引き続いて五島軒とされ再出発していった。どのような時代でも新しいことを進めるのにはロマンがある。人は常に新しいものを求めていく。しかし、定着した味を守り、貫く事にも又ロマンがなければならない。発展を続ける歴史の中でつちかわれた風土をどうよみがえらせ、再生していけば良いのか。カレー缶詰、ケーキ類の惣

菜製造販売は現在の五島軒の中核の一つに育っている。カレーをとれば、その味はもはやインドやメキシコの現地料理とは似て非なるものである。日本産ジャポニカ米、コシヒカリにピッタリのカレー、インド風日本カレーである。英吉の伝



統を詰め込んで味わってもらえるものだ。新しい点があるとすれば、古典料理を缶に詰めるという発想だけである。歴史的風土を116年の経営に探すとすれば、このような小さな努力＝飛躍の積み重ねを継続する姿勢である。その行為が結果として風土そのものを守り、育ててくれる。建造物同様に味も、音楽も、あらゆるものが再生を求めている。店訓である創業守成ということばを私はこのように理解している。

（五島軒社長）



◆函館の伝統

常に新しいものを求めつつ、古いものを大切に◆

安政元年（1854年）函館、神奈川が日米和親条約により開港。しかし、当時函館には既にヨーロッパやアメリカなど各国からの船が出入りしていました。外国船では、ラッコ、アザラシ漁のロシア船、アメリカの捕鯨船が多く、彼らの現地調達に應えるために函館奉行から農家に対し「ジャガイモ」の増産命令が出されたほどでした。

幕末期にアメリカ人が経営するバーがあり、また干重三郎という洋食を出すレストランが開店していたのも不思議ではなかったのです。

各国の領事館と教会、修道院、学校などは一般民家の建築にも影響を与え、和洋折衷の家屋が軒を並べていました。

函館の建築物の殆どは大火によって焼失しましたが、残った建物の中に当時の豪華さを想像することができます。

◆苦難の歴史をのりこえて

相次ぐ大火災と強制徴用◆

明治19年7月の函館新聞の広告によると、「永年フランスで修業した、老巧の料理人を雇い入れ、宴会もできる本格的なフランス料理店開店」と伝えています。函館は浜風が強く、火事の発生が異常に多かった。このあとも店は明治29年の大火で末広町基坂下に移転、更に明治40年の大火で現在地に再度移転しました。現在地でも大正10年に被災し、函館史上最後の大火となった昭和9年の大火では焼失したが、その都度新築して現在にいたりました。第2次世界大戦下の米軍の爆撃では多くの都市が破壊されました。函館では連絡船、造船所は壊滅状態でしたが、幸いにも市街地は被害が軽微であり、当店も無事でした。しかし、終戦と共に五島軒の建物はアメリカ占領軍により、強制徴用され、この期間、昭和20年10月から25年8月までは、市内西川町の市民館内で細々と営業を続けざるを得ませんでした。また、米軍から返還後、日本政府から少額の補償金が支給されたのは更に3年後の昭和28年のことでした。（五島軒のしおりより）

事務局だより

- ☆ 6月10日 平成7年度定例総会原案は一応提案通り了承可決された。講演は村井雄二郎氏の「ジョン万次郎について」である。
- ☆ 7月10日 総会後の第一回運営委員会で小委員会の構成と事業担当者等につき協議
- ☆ 7月21日 海同会館修復落成祝賀会に会長出席
- ☆ 7月25日 第1回小委員会で前回の運営委員会での取決を確認。各パートで事業の推進を行う。
- ☆ 8月16日 預金通帳者を工藤光雄氏より会長へ
- ☆ 8月20日 小樽再生フォーラム主催の「小樽まちなみゼミ」へ浜島会長出席
- ☆ 8月25日 H・P・B主催ビヤパーティに会長出席  
ハリファクスサミットで星の街会議の提唱と日本海沿岸都市会議を函館で…の市長講演があった。
- ☆ 8月29日 箱館奉行所復元促進期成会の定期総会に会長出席。市文化財担当者より各種の報告。
- ☆ 9月8日 第18回全国町並みゼミ妻籠大会に、田

尻副会長、市より都市景観課の榎森隆介氏出席  
☆ 9月23日 西部ウォーターフロントの見学会と学習会開催、講師は千代 肇・阿部正二の両氏

編集後記

全国の町並み仲間から五島軒の由来等に関し度々質問があり、今回若山社長のご登場を願いました。

この夏、本州日本海側を旅した折、舞鶴で数多のレンガ倉庫群に出あい、その見事さに一驚、何故かくも立派な建築物が……については、れんが博物館の石原主任より玉稿をいただきました。

ご繁忙な最中ご執筆下さった皆様へ心より謝意を表します。

9月9日の夜、復元なった木曾妻籠宿本陣前は町並み参加者で賑わった。仲秋の名月も格別であったが竹富島からの親子による蛇皮線と歌は人々の心を揺さぶった。沖縄の竹富島は人口300余で集落が傳建地区になっている。ふるさと創生資金も加え目下、町並み基金7千余万円を積み上げた。さて人口30万の函館は……田尻